

日英翻訳における転移修飾表現の分析

—認知言語学的翻訳論の観点から—

貞 光 宮 城

An Analysis on Transferred Epithet in Japanese-English Translation: From a Viewpoint of Cognitive Linguistic Translation Studies

Miyagi SADAMITSU

1. はじめに

本稿は、拙論（2012）の続編である。前稿では、転移修飾表現（transferred epithet：以下TE）に注目し、英語原典から日本語テキストに翻訳される場合に、この修辞表現がどのように処理されるかを事例に基づいて調査・考察した。その際、筆者がこれまで分析してきた、認知言語学的観点からの分析から帰結されることが、実際にはどのようなになっているかを実証的に論じた。その帰結というのは、認知言語学的な分析からすると、原典と同様の表現上の効果を得るためには、英語においてTEで表されたものは、翻訳の日本語でも同じように表されて然るべきではないかということを予測する課題についてである。

本稿では前稿とは逆の方向性の翻訳資料に基づいて、同様の検証・考察を行う。つまり、日本語の原典（起点テキスト）から英語への翻訳（目標テキスト）の事例を調査・分析するのである。日本語の原典においてTEで表された箇所が、英語の翻訳においても同様の修辞的表現で表されているかを調べ、上述の課題に対して、それが確かめられるかどうか実証的な分析を試みる。

2. 転移修飾表現の認知言語学的分析

前節で述べた、TEについてのこれまでの認知言語学的な分析についての詳細は、拙論（貞光1999、Sadamitsu 1999、貞光2012）を参照していただきたい。本稿の議論において最低限必要とされる事柄に絞ってその概要のみを説明しておく、と、まず、拙論では、英語のTEを分析するために、事例を4つのクラスに分類した。その分類の基準は、TEが本来属す

べき語（本体あるいは principal）と転移修飾語が実際に修飾している語（転移先あるいは substantive）との関係に基づいてである。具体的な分類はそれぞれ以下の通りである。

＜TEの分類＞

Class 1 TE：転移先と本体が離れていない、転移先が本体の一部であるような例。

Class 2 TE：転移先が本体から離れるか離れないかの、本体の所作、声、態度であるような例。

Class 3 TE：転移先が本体から完全に離れた周りのものであるような例。

Class 4 TE：転移先と本体に最も距離のあり、転移先が本体のおかれている時間、空間である例。

ただし、この4つのクラスは明確に区分されるものではなく、それぞれ連続的な広がりを成す。

この分類に基づき、認知言語学的観点からこの言語現象を分析し、以下の点を論じた。

①修飾関係の仕組みについて、その修飾語の転移は、事態全体からその事態において最も際立ちのある参与者へ転移する傾向があること。②表現上の効果については、関係全体を漠然と修飾するのではなく、最も際立ちのあるモノに碇を下ろすことから生ずること。③転移される形容詞の特徴として感情や内的状態を表す形容詞が多い理由は、それが直接客観的には捉えにくい性質を持つためであり、転移修飾が生ずる動機づけについては、感情や内的状態といった直接には捉えにくいものを具体的に表に現れたもので表現しようとする（あるいはせざるを得ない）ためであるということである。

拙論での分析対象は英語の言語資料である。ここで、人間が外界をどのように捉えているかということがその言語形式に大いに反映されたとする立場である、認知言語学的観点からすると、英語のみならず他の自然言語においても（この言語現象が生じうるならば）同様の分析が可能となることが想定される。となると、ある言語においてTEで表されたものは、それを翻訳する場合、とりわけ原典テキストで表現されたような内容および効果を同じように表そうとするなら、翻訳テキストでも同様の修飾的表現が用いられる可能性が高いのではないかということ进行予測することになる。本稿では、この点について、前稿とは逆の翻訳方向、つまり、日本語から英語への翻訳テキストを分析し、論じていく。

3. 調 査

3.1 調査方法

前節で提示した課題を論じるため、以下の原典4作品とその翻訳を言語資料とし、調査・検証を行う。

日本語原典：

- ・有島武郎「一房の葡萄」
- ・宮本輝「大晦日の書斎」
- ・佐藤さとる『だれも知らない小さな国』「第一章 いずみ」
- ・星新一『きまぐれロボット』「新発見のマクラ」「試作品」「薬のききめ」「悪魔」「災難」「九官鳥作戦」「きまぐれロボット」「便利な草花」「夜の事件」

英語翻訳：

- ・佐々木高政訳 *A Bunch of Grapes*
- ・宮崎充保訳 *My Writer's Den on New Year's Eve*
- ・McCreery, Ruth訳 *A Little Country No One Knows*, Chapter 1 Spring
- ・Matthew, Robert訳 *The Capricious Robot*, The Pillow; Trial Products; The Drug; The Devil; The Disaster; The Myna Birds; The Capricious Robot; The Convenient Flower; A Night Encounter

日本語原典は、韻文ではなく現代英語の散文作品で、¹ そのジャンルも、小説、随筆、児童文学など、一つのジャンルに偏らないようにした。また翻訳者についても4人の異なった翻訳者によるものを採用し、個人的な表現の癖や文体に偏りがないようにした。

拙論（2012）と同様に、まず、原典および翻訳テキストにおいて、TEがどれだけ存在するかを調べる。次に、原典テキストにおいてTEで表された箇所がそれぞれ翻訳テキストにおいてどのように表現されているかを見、原典でTEで表現されていた箇所が翻訳でもTEで表現されているかどうかを確認する。このようにして得られたデータを、TEの4つのクラス分けにしたがって分類し、それぞれの表現が翻訳においてもTEとして表されているかを分析した。

3.2 調査結果

前節の調査方法によって得られたTEの言語資料を、4つのクラスごとに分類し、日本語原典中に見つかったTEの総数、それに対応する英語翻訳においてもTEで表現されていた数、そして、英語翻訳中で見つかったTEの総数に分けて集計した。その結果は以下の通り

である。

〈TEのクラスごとの事例数〉

「一房の葡萄」

	Class 1	Class 2	Class 3	Class 4
日本語原典中の総数	3	0	0	0
対応する英語翻訳の数	3	0	0	0
英語翻訳中の総数	3	8	1	3

「大晦日の書斎」

	Class 1	Class 2	Class 3	Class 4
日本語原典中の数	0	0	1	1
対応する英語翻訳の数	0	0	0	1
英語翻訳中の総数	1	3	3	2

「だれも知らない小さな国」

	Class 1	Class 2	Class 3	Class 4
日本語原典中の数	0	3	0	0
対応する英語翻訳の数	0	0	0	0
英語翻訳中の総数	1	0	0	0

「きまぐれロボット」

	Class 1	Class 2	Class 3	Class 4
日本語原典中の数	2	1	0	1
対応する英語翻訳の数	1	1	0	0
英語翻訳中の総数	1	1	0	0

総計

	Class 1	Class 2	Class 3	Class 4
日本語原典中の数	5	4	1	2
対応する英語翻訳の数	4	1	0	1
英語翻訳中の総数	5	12	4	5

ここで、各クラスに分類される事例をそれぞれ挙げておく。（下線はすべて筆者による。
また、ここで提示している英語の事例は、日本語原典の翻訳として対応したものを挙げているわけではない。）

Class 1 TE :

- (1) けれども僕は出来るだけ知らない振りをしていなければならないと思って、わざと平気な顔をしたつもりで、仕方なしに運動場の隅に連れて行かれました。

（「一房の葡萄」 p.13）

Some two months later he brought the pillow back to Dr. F. with a disgruntled look on his face.
(*The Capricious Robot*, p.9)

Class 2 TE :

- (2) そのときまでの、いきごんだ足どりは、ここですっかり消えてしまった。
(「だれも知らない小さな国」 p.15)

I fought his hand as hard as I could, but there was no contending against such odds, and from my pockets were dragged out, with cruel rapidity, first my poor little marbles, then my precious leaden counters, and finally those two fatal blocks of water-colours.
(*A Bunch of Grapes*, pp.22-3)

Class 3 TE :

- (3) だから、私の折々の思い出に浮かび上がる母は、醜態をさらしている恥ずかしい母ばかりであった。²
(「大晦日の書斎」 p.127)

At that moment the doleful memory came back.
(*The Bunch of Grapes*, p.32)

Class 4 TE :

- (4) (前略) たいてい二十九日か三十日あたりで、家のなかは、一年でもっともあわただしいときということになって、何の役にも立たない私は、ただの邪魔者でしかなく、(後略)。
(「大晦日の書斎」 p.173)

My smile faded away, and with it the cheerful mood and everything.
(*The Bunch of Grapes*, p.32)

こうした事例を、日本語原典および英語翻訳のそれぞれにおいて集計したものが、上の一覧表である。

4. 考 察

前節の調査結果を分析し、日本語から英語への翻訳において、まず本論の当初の課題であった、原典でTEが用いられた場合その翻訳も同様な修辞表現が用いられるのかという点について考察する。続いて、前節の調査結果を認知言語学的観点から分析し、TEのあり方自体について考察を与える。

4.1 転移修飾表現の翻訳は転移修飾表現か

前稿に引き続き、本論の当初の課題は、原典でTEが用いられた場合その翻訳も同様な修飾表現が用いられるのだろうかということであった。というのも、拙論（貞光1999、Sadamitsu 1999）の分析にしたがえば、TEで表された内容は、その認知的生成メカニズムおよびそこから生じる文体的効果まで考慮に入れると、それ以外の表現方法では表しきれない可能性があるとして分析しているからである。³

では、前節の調査結果を見てみよう。ここで得られた結果の数値を見る限りは、日本語の原典で用いられたTEが、英語に翻訳されると、そのすべてがそのまま同じようにTEで表されているわけではないという結果である。前稿で議論した、英語原典から日本語への翻訳の場合では、それでもある程度の傾向が見て取れたが、今回の日本語原典から英語への翻訳の場合は、その傾向もはっきりとは見られないという結果である。⁴

具体的に、日本語原典においてTEであった箇所が英語翻訳ではTEとして表現されていない事例としては、以下のような例がある。

- (5) 「うむ。すばらしいききめだ。子供のころのことを、ありありと思い出せた。
とてもなつかしい気分を、味わえた」

（「きまぐれロボット」 p.18）

“Yes. It worked wonderfully. My childhood came back vividly. It made me feel quite nostalgic.”
（*The Capricious Robot*, p.15）

日本語原典ではTEを用いた名詞句として表現されているものが、英語翻訳では動詞句（対応する修飾語句としては叙述形容詞）として表現されている。この点は、前稿で指摘した、英語と日本語の言語類型論上の違いからくる特徴とも異なることになる。つまり、同様の伝達内容を言語化する場合に、英語は名詞構造を好む言語であるのに対し、一方日本語は節構造を好む。そのため、英語原典においてTEで表現されていたとしても、その日本語翻訳においてはそうでない（そう表現しにくい）場合が起こりうるというものであった。この傾向を示す例としては、以下のようなものがある。

- (6) 僕の大好きな若い女の先生の仰ることなんかは耳にはいりはいっても、なんのことだかちっともわかりませんでした。先生も時々不思議そうに僕の方を見ているようでした。

（「一房の葡萄」 p.13）

The voice of the young lady, my favourite teacher, did reach my ears, but my brain

failed to register anything she said. It may have been just my fancy, but she seemed to throw curious glances at me every now and then.

(*A Bunch of Grapes*, p.19)

日本語原典ではTEで表現されていないにも関わらず、英語翻訳ではTEで表されている。この傾向は、調査結果の総計において、日本語と英語での作品中のTEの出現数の違いにも表れている。しかしながら、上の例 (5) はこの特徴とも食い違っているということになる。⁵

本稿の分析からは、当初提示した課題を有意に実証する結果は得られなかったと言わざるをえない。

4.2 認知言語学的観点からみた転移修飾表現の特徴

前稿での考察と同様に、今回の調査結果から、TEのクラスごとの事例数について考察しておく。まず、クラス間の差についてであるが、英語原典から日本語への翻訳のときと同様に、総計としては、Class 2 TEの数が突出して多いという結果が得られた。このことは、前稿で指摘した分析内容と一致する。つまり、認知言語学的観点から見れば、参照点能力の観点から、ここでの修飾語の転移について、事態全体からその事態において最も際立ちのある参与者へ転移する傾向があると考えられる。そして、その最も際立ちのあるものとして「本体の所作、声、態度」が参照点として非常に採用されやすいということがいえる（貞光2012参照）。

また、TEが翻訳テキストでも保持されるか否かの頻度に関して、クラスごとで有意な差異が認められるかどうかについては、前節で述べたように、今回得られた事例数では十分に考察することは難しい。だが、Class 1 TEにおいて比較的TEが保持されているようである。このことは、翻訳方向が正反対の前稿の分析結果と一致している。この点は、認知言語学的立場から見れば、適切に説明できるものと考えられる。つまり、本体（参与者）の内的状態や感情を表現する際に、それが際立ちを持って表にあらわれたと認識されるような、その本体の近くに存在するモノに焦点をあて、それを修飾するかたちで表現している。まさにそれは、概念化者が外界を認識したその様子をそのまま言語化した、極めて自然な表現方法であると分析されるのである。このことが、転移先と本体が離れていない、転移先が本体の一部であるようなClass 1 TEの例が、両言語において採用されやすいことを説明するものと考えられる。⁶

5. お わ り に

本稿では、前稿の続編として、原典でTEで表現されたものは翻訳後もTEで表現されるのではないかという課題を論じた。それは、認知言語学的観点からのTEを分析した拙論（貞光1999、Sadamitsu 1999）の分析結果にしたがえば、人間が外界をどのように捉えているかということがその言語形式に大いに反映されるのであれば、言語に関わらず、同様の表現方法を採用するはずであると予測されるからである。このことを実証するために、本稿では、前稿とは逆の、日英翻訳に注目し、実際の翻訳状況を調査することでこの点を検証しようと試みた。しかしながらその結果は、日本語の原典においてTEが用いられている場合、その英語の翻訳においても同様にTEが用いられるかどうか、少なくともその傾向がみられるかどうか、十分判断ができるところまで到達できなかった。これは、言語資料の少なさから説得力を持つ結果が得られなかったと言わざるを得ない。この点は引き続き、調査・分析を行っていくつもりである。

また、どのクラスのTEが出現頻度が高く、さらに翻訳間でもその表現方法が保持されるかという点について、日英語間翻訳においても、前稿と同様に、認知言語学の立場からその動機づけについて議論した。今回の調査では、Class 2 TEが出現頻度が高く、Class 1 TEにおいて翻訳間でその表現方法が最も保持されていた。これは、概念化者が外界を認識し言語化する際の過程が、最も自然に表現に反映されたものであると考えられる。つまり、客観的には捉えづらい、本体（事態の参与者）の内的状態を形容するために、それが最も表に現れ、最も際立ちを持った、その本体の身体の一部や、その本体の所作・声・態度をその事態全体の参照点として採用し、それを修飾するという方法を取っている。それがClass 1 TEとClass 2 TEの事例が多く見つかり、また翻訳間でも比較的表現方法が保持されることにつながっていると論じた。

本文中でも述べたが、本稿での調査はまだまだ説得力を持つ段階に至っていない。それには圧倒的な言語資料の収集と調査が必要である。今後も、分析対象とする作品の種類を増やし、様々な翻訳者による作品を調査し、研究を続けていく必要がある。このことは、前稿の英語から日本語への翻訳についても同様のことが言える。さらに総合的かつ客観的に実証していくために、英日・日英の両方向の翻訳における修飾表現の分析を続けていく予定である。

註

- ¹ 転移修飾表現のような修飾表現を言語学的に分析するために、様々な形式上の制限が伴う韻文作品は分析対象から外している。詳しくは、Sadamitsu（1999）他を参照されたい。

- 2 ここでは、「恥ずかしい」という感情を抱くのは作者（本体）であり、母ではないという点から、このクラスに分類している。しかし、この分類については疑問が余地が残ることも確かである。転移修飾とは考えられない通常の形容詞＋名詞の連結において、名詞がその形容詞で表されている感情を引き起こすというつながり方をするものがあるからである（例：「おもしろい本」「悲しい話」）。さらに、「おもしろい顔」などでは、その顔によって見ている者がおもしろさを感じる場合と、その顔の主体自身の感じているおもしろさが顔に表れている場合（転移修飾）とが起りうる。この点については稿をあらためて論じたい。
- 3 拙論（1999、2012）でも述べたが、安井他（1976）によれば、TEによって表された内容は「本来属すべき語を修飾するようにパラフレーズしようとすると、非常に複雑になったり、ほとんど不可能であったりする。」（安井他 1976: 176）とされている。ここで指摘されているのは同一の言語間のパラフレーズについてである。果たして異なる言語間の翻訳においてはどうかという点が、本論の扱っている課題である。（当然のことながら、パラフレーズと翻訳とは同一ではないことは承知している。）
- 4 見つけられたTEの事例自体が（前稿の言語資料と比較しても）非常に少ないことが大きく影響していると考えられる。調査対象の種類は前稿よりも偏りをなくしていったが、得られたデータの全体数が少ないため、これだけで傾向の有無を論ずることは難しいと思われる。これには引き続き調査が必要である。
- 5 この一例（5）だけで前稿で分析した傾向の有無を判断できるわけではないが、翻訳における言語分析の難しさをこの点でも見ることができる。つまり、翻訳に影響する要因は、その起点言語および目標言語のそれぞれの特徴をはじめ、翻訳者の好む文体や表現方法など、さまざまあり、それらが複雑に関与している。さらなる研究が求められるところである。
- 6 この分析にしたがえば、同様のことがClass 2 TEについても当てはまるはずである。しかしながら、今回の調査では、Class 2 TEでは翻訳間で問題の修辞表現が有意に保持されているとは言いがたい結果となっている。この点も含め、さらに説得力を持つかたちで実証するには、前節でも述べたが、圧倒的な事例数が必要である。引き続き、言語資料の収集と調査が求められる。

資 料 作 品

日本語原典：

有島武郎（1922（1988））「一房の葡萄」『一房の葡萄 他四編』岩波文庫, pp.7-22.

佐藤さとる（1959（2010））「第一章 いずみ」『だれも知らない小さな国』講談社文庫, pp.9-54.

星新一（1972）「新発見のマクラ」「試作品」「葉のききめ」「悪魔」「災難」「九官鳥作戦」「きまぐれロボット」「便利な草花」「夜の事件」『きまぐれロボット』角川文庫, pp.7-49.

宮本輝（1995）「大晦日の書斎」『生きものたちの部屋』新潮文庫, pp.171-182.

英語翻訳：

佐々木高政訳（1969）A Bunch of Grapes, *A Bunch of Grapes; A Cripple and a Blind Man*, Ruby Books 13, 朋友出版, pp.6-40.

McCreery, Ruth訳（1959）Chapter 1 Spring, *A Little Country No One Knows*, Kodansha English Library 34, pp.7-40.

Matthew, Robert訳（1986）The Pillow; Trial Products; The Drug; The Devil; The Disaster; The Myna Birds; The Capricious Robot; The Convenient Flower; A Night Encounter; *The Capricious Robot*, 講談社英語文庫, pp.7-36.

宮崎充保訳 (1995) My Writer's Den on New Year's Eve, 『山口大学教養部紀要 第29巻 人文科学篇』, pp.83-90.

参考文献

- Bell, Roger T. (1991) *Translation and Translating: Theory and Practice*, Longman.
- Boase-Beier, Jean (2011) *A Critical Introduction to Translation Studies*, Continuum.
- Bolinger, Dwight (1967) "Adjectives in English: Attribution and Predication," *Lingua* 18: 1-34.
- Gibbs, Raymond W. (1994) *The Poetics of Mind*, Cambridge University Press.
- Hall, Robert A., Jr. (1973) "The Transferred Epithet in P. G. Wodehouse," *Linguistic Inquiry* 4: 92-94.
- Jakobson, Roman (1959) "On Linguistic Aspects of Translation," in Lawrence Venuti ed. (2012) *The Translation Studies Reader, Third Edition*, Routledge, pp.126-131.
- Lakoff, George (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things*, University of Chicago Press.
- Lakoff, George and Mark Johnson (1980) *Metaphors We Live By*, University of Chicago Press.
- Langacker, Ronald W. (1991) *Concept, Image, and Symbol*, Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. (2000) *Grammar and Conceptualization*, Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*, Oxford University Press.
- Munday, Jeremy (2008) *Introducing Translation Studies: Theories and Applications, Second Edition*, Routledge.
- Nida, Eugene (1964) "Principles of Correspondence," in Lawrence Venuti ed. (2012) *The Translation Studies Reader, Third Edition*, Routledge, pp.153-168.
- Ortony, Andrew (1988) "Are Emotion Metaphors Conceptual or Lexical?" *Cognition and Emotion* 2, 2: 95-103.
- Pym, Anthony (2010) *Exploring Translation Theories*, Routledge.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman, London.
- Sadamitsu, Miyagi (1999) "A Cognitive Account on Transferred Epithet," *Osaka University Papers in English Linguistics* 4, pp.69-103.
- Shen, Yeshayahu (2002) "Cognitive Constraints on Verbal Creativity: The Use of Figurative Language in Poetic Discourse," in Elena Semino and Jonathan Culpeper eds. *Cognitive Stylistics: Language and Cognition in Text Analysis*, John Benjamins, pp.211-230.
- Taylor, John R. (2003) *Linguistic Categorization, 3rd Edition*, Oxford University Press.
- Tobias, Shani (2006) "Culture-specific items in Japanese-English literary translation: comparing two translations of Kawabata's 'Izu no Odoriko,'" *Monash University Linguistics Papers*, 5, 1, pp.27-35.
- Tsur, Reuven (2002) "Aspects of Cognitive Poetics," in Elena Semino and Jonathan Culpeper eds. *Cognitive Stylistics: Language and Cognition in Text Analysis*, John Benjamins, pp.279-318.
- 安西徹雄 (1982) 『翻訳英文法―訳し方のルール』 バベル・プレス.
- 池上嘉彦 (1978) 『意味の世界―現代言語学から視る―』 NHK出版.
- 大塚高信、岩崎民平、中島文雄編 (1959) 『英文法シリーズ 第8巻 形容詞』 研究社.
- 斎藤兆史 (2007) 『翻訳の作法』 東京大学出版会.
- 佐々木高政 (1980) 『英文解釈考』 金子書房.
- 貞光宮城 (1999) 「転移修飾語に関する一考察―認知的観点から―」 *KLS* 19, pp.65-75.
- 貞光宮城 (2012) 「英日翻訳における転移修飾表現の分析 ―認知言語学的翻訳論の観点から―」 『追

- 手門学院大学 国際教養学部紀要』第6号, pp.17-26.
- 佐藤信夫 (1978) 『レトリック感覚』 講談社.
- 佐藤信夫 (1981) 『レトリック認識』 講談社.
- 佐藤信夫 (1996) 『レトリックの意味論』 講談社.
- 瀬戸賢一 (1997) 『認識のレトリック』 海鳴社.
- 広田紀子 (2007) 『翻訳論 言葉は国境を越える』 上智大学出版.
- 北條文緒 (2004) 『翻訳と異文化 原作とのくずれ>が語るもの』 みすず書房.
- 松浪有、池上嘉彦、今井邦彦編 (1983) 『大修館英語学事典』 大修館書店.
- 宮崎充保 (1992) 「Traduttore, Traditore--日本の文芸作品の英訳の一私論」 『山口大学教養部紀要 人文科学篇』 26, pp.127-141.
- 宮崎充保 (1998) 「日本の文芸作品の翻訳 (4) 原典作品と翻訳作品の「等価性」 : 『寒雀』 の英訳と実践と理論」 『英語と英米文学』 33, pp.191-224.
- ムーナン, ジョルジュ著, 伊藤晃, 柏岡珠子, 福井芳隆, 丸山圭三郎訳 (1980) 『翻訳の理論』 朝日出版社.
- 矢澤真人 (1998) 「日本語の感情・感覚形容詞」 『言語』 第27巻第3号: 50-56.
- 安井稔、秋山怜、中村捷編 (1976) 『現代の英文法 第7巻 形容詞』 研究社.
- 山梨正明 (1988) 『比喩と理解』 東京大学出版会.
- 山梨正明 (2000) 『認知言語学原理』 くろしお出版.

